

近頃、日が暮れるのが早くなった。友達と遊んでいた子どもやクラブ活動をしていた子どもが家路に急ぐ頃には、もう外は真っ暗である。子どもを狙った犯罪が増えているため、外で元気に遊んでもらいたいものの、親の心配はつきない。子どもたちがのびのび生活できる地域社会を作るためには、どうしたら良いのだろうか。フジテレビで放映されているアニメ「サザエさん」の中には、以下のような場面があった。

サザエさんに夕飯の買い物を買われたカツオ君は、買い物の途中で友達に会い、そこで遊び始めてしまう。その様子を見た同級生の花沢さんに、「早く買い物に行かなきゃだめよ」と注意される。お店に行くと、店主にも「まっすぐ家に帰りな」と注意される。その帰り道、カツオ君はまたしても遊び始めてしまう。すると、通りすがりの近所のお姉さんにも、「カツオ君、道草していちゃだめじゃない」と声をかけられる。ようやく家に帰ったカツオ君は、玄関で待ち構えていたサザエさんに、「ずいぶん道草していたようね」と言われる。カツオ君はとても驚き、「姉さん、どうして分かったの?」と聞くと、サザエさんは得意になって、「主婦の情報網を甘く見ちゃだめ、ご近所の目は監視カメラみたいなものなのよ」と言った。ここでサザエさんが言う、「主婦の情報網」「ご近所の目は監視カメラ」こそ、子どもたちを安心して育てる地域社会づくりに必要なことである。地域で育つ子どもたちのためには、防犯カメラや防犯ブザーなど、機械に頼った安全管理対策だけではなく、これからの未来を担う子どもたちを自分たちが育てていこうという、温かい人間のまなざしとしての住民相互の「監視カメラ」と、情報伝達のネットワークが求められている。

しかし、現在の地域社会では、「監視カメラ」がしっかりと機能しているだろうか。近隣同士の付き合いがなくなっており、マンションの隣の住人がどのような人か分からないことが多い。主婦たちの立ち話も見られなくなり、生活・暮らしの情報は、人からではなく、インターネットを通じて収集する時代となっている。「雷おやじ」と言われるように、悪いことをした子どもに対して、時には注意したり叱ったりしてくれる大人も少なくなった。核家族化の進行、母子家庭や高齢者の一人暮らしの増加など、家族の規模も小さくなってきている。それと同時に、夫婦の共働きや習い事に忙しい子どもが増え、長時間労働による家族のすれ違いが進んでいる。家族が一つのテーブルを囲み、一緒に食事をすることも少なくなった。このように、現代社会では、家族が少なくなる上に他人との交流が少なく、地域住民との関係も希薄になっていると言えるし、そのことを私自身も実感している。

最近、家の近所で中学生の男の子を見かける。あまり見たことがない顔である。このことを親に言うと、近所に住む老夫婦の家に、長男家族が引っ越してきたので、その子どもだという。しかも、長男家族が引っ越してきて、もう1年近くになるという。その話を聞

いて、自分は今まで、ご近所さんとどのような関わりをしてきたのだろうと疑問に感じた。また、ある朝に近所の人から電話があった。「　　さんがお亡くなりになったので、今晚お通夜があります」とのことであった。その電話を受けて、本当に驚いた。　　さんは、私の家のすぐ近くに住んでいる方で、以前から体調が悪かったということも、お亡くなりになったということも、その電話があるまで知らなかった。こんなに近くに住んでいたのに、何も知らなかった自分が本当に恥ずかしかった。

学校の授業、課題、実習などに追われて、近所のことに目を向ける余裕がなくなっていた。家にいる時間も短いので、近所の人とコミュニケーションをとる機会もなかった。顔と顔を合わせてあいさつすることも、世間話をするこもなくなっていた。町内で行われるバザー、お祭り、子ども会など近所の人と交流できる機会は何度かあったが、「そのようなことをしている時間があつたら、やるべきことを片付けてしまおう」という考えがあつた。家に帰ってくると、ポストに回覧板が入っている。そして、私もその回覧板を次のお宅のポストに入れる。チャイムを鳴らして、わざわざ手渡しすることなどほとんどない。

決して、近所の人と関わりを持ちたくないわけではない。関心がないわけではない。眠い目をこすって学校に急ぐ生活は、地域のことに目を向ける機会や気力を奪ってしまっていた。私が見ている限り、多くの大人たちが時間に追われる生活を送っている。大人たちがこのような状態では、子どもたちがのびのび生活できる地域社会を作ることには困難であるし、情報収集のネットワークも構築することができない。

家族関係や地域社会のあり方がどんなに変化しても、子どもたちの成長に必要なものは変わらないはずである。子どもたちは、その成長にともなって行動範囲をどんどん拡大し、地域のなかで生活する時間を増やしていく。私自身、ハイハイをしていた頃は、家のなかで母親と一緒に過ごすことが多かったが、よちよち歩きができるようになると、家の庭でどろんこ遊びをするようになった。幼稚園に入園する頃になると、近所の公園や空き地に行つて遊ぶようになった。新しい友達もできた。野良猫を追いかけて、知らない場所まで行ってしまったこともあつた。石をつかつて、道路に絵を書いて遊んだ。小学校に入学する頃になると、お気に入りの自転車を走らせて、友達の家まで遊びに行つたり、まだ行つたことのない場所をあちこち探検したりした。自分たちの秘密基地を作つたり、時にはイタズラをしたりした。外に出るたびに、新たな発見や驚きでいっぱいであつたし、子どもの目にはそれがキラキラと輝いて見えた。

このように、親の知らないところで、子どもたちは様々なかたちで地域社会との関わりをもつことになる。「あれもしたい」「ここに行つてみたい」と色々なことに興味・関心を

もち、自らの行動範囲を広げていく。親に内緒で、親の目の届かない場所に行くことも多くなる。親の目の届かない場所に行ったときに、何らかの理由で、大人の手を借りたいと思うときもある。そのようなときに、「何かあったの?」「どうかしたの?」と一声かけてくれる大人が、子どもにとっては大きな存在となる。のびのび生活できる地域社会をつくるためには、大人たちが子どもに目をかけ、気軽に声をかけることが大切である。地域の人びとに見守られているという安心感が、子どもの成長には必要不可欠である。

しかし、地域社会のつながりが希薄になっており、子どもを狙った犯罪が増えている現在では、大人たち自身も神経質になってしまっている。「子どもに声をかけたら、『不審者』と間違われてしまうのではないか」と思ってしまう大人も多い。親が子どもに「世の中には危険がいっぱいなよ」「知らない人とは関わってはいけないよ」と口うるさく言っている場合も多い。子どものことを心配して、大切な子どもを守りたいという気持ちは分かるのだが、これでは子ども自身も神経質になってしまう。子どもたちの心のなかに、自然と「知らない人は怖い人」という意識が植え付けられてしまっている可能性が高い。地域のなかで何かあったときに、周りの大人が声をかけてくれたとしても、どのような反応をしたらよいのか分からなくて、怖気づいてしまう子どもも多いかもしれない。地域のなかで、大人と子どもが打ち解けられる関係になるためには、基本的なコミュニケーションの積み重ねが必要であると感じる。

私は、基本的なコミュニケーションを積み重ねていくためには、「あいさつ」が大きな役割をもつと考える。あいさつは、人間関係の始まりである。「おはようございます」「こんにちは」「こんばんは」という出会いのあいさつから、その日の相手との関係がスタートする。相手の存在に気づいているのに、「面倒くさいから、あいさつしなくてもいいや」「自分があいさつしても、向こうは気づいてくれないだろう」と考えてしまい、あいさつをしないまましていると、相手の存在を無視することになり、その後の相手との関係はスタートしない。そして、何か困ったことが生じても声をかけにくくなり、いざというときに困ることになる。私たちが毎日交わしているあいさつは、決して無意味なものではない。お互いの存在を認めて、友好的に関わろうとする意思の表れなのである。

また、あいさつは出会いのときだけではない。私たちは、外に出かける時は「ってきます」、家に帰ってきたら「ただいま」、迎える側は「おかえりさない」、ご飯を食べるときは「いただきます」、食べ終わったら「ごちそうさまです」、何かしてもらったら「ありがとう」、悪いことをしてしまったら「ごめんなさい」と、生活の節目で繰り返しあいさつを交わすことになる。このように、あいさつを通して、地域のなかで生活する人びとが、大

人と子どもが、積極的にコミュニケーションを図るきっかけになればいいと考える。

たった一言のあいさつから、人間関係が始まっていくことを実感した出来事がある。それは、今から二年ほど前である。私は学校に行くときに、電車を利用していった。駅の待合所で電車を待っていると、毎朝、私の隣に座るおじいさんがいた。最初の方は、「あっ！またこのおじいさんだ」としか思っていなかったし、会っても目を合わせる程度であった。次の日も、次の日も、そのおじいさんは私の隣に座った。私はその度に、「このおじいさんはどんな人なのかな？」と思った。ある日、「おはようございます」の意味を込めて、私が軽く会釈をすると、おじいさんもニコッと笑って会釈してくれた。とても些細なことだったが、とても嬉しかった。次の日、「おはようございます」と声に出してあいさつすると、向こうもちゃんと返してくれた。また、次の日は「おはようございます、今日も寒いですね」と一言添えることができた。そして、おじいさんから「いつから冬休みなのか？」「学校、がんばってね」と話しかけてもらえた。毎朝、一緒に待合所で電車を待ち、一緒に電車に乗り込む。私の方が先に降りるので、おじいさんに会釈すると、向こうもちゃんと返してくれる。それが、日課になっていた。そのため、おじいさんが待合所に現れない日は、「風邪でもひいたのかな？」と心配になった。おじいさんの名前を知っている訳でもないし、その電車に乗ってどこに向かっているのかも知らない。しかし、「おはようございます」という小さなあいさつを通して得ることができた“友人”であるとは思っているし、地域社会のなかで、気軽にあいさつができる関係作りは大切なことだと実感した。

そこで、地域の人たちが自らあいさつをするきっかけとなるように、「群馬、あいさつプロジェクト～その一言が、みんなの笑顔！～」というイベントを開催したらどうだろうか。このイベントでは、家族、友達、恋人、近所の人、名前は知っているけど話したことがない人、偶然通りかかった人などできるだけ多くの人に、コミュニケーションの第一歩である「あいさつ」をすることを目標にする。テレビ、ラジオ、ポスター、広報などでイベントの周知をはかる。また、路地に咲いている花に向かって、キラキラとまぶしい太陽に向かって、亡くなってしまったけど大切な人を思い浮かべ、空に向かって「おはようございます」「今日も行ってきます」と言ってもいい。県民が一丸となって、気持ちの良いあいさつを心がけてみたらどうだろうか。このイベントをきっかけにして、自ら進んであいさつができるようになればいいと思う。あいさつを通して、人間関係が広まるかもしれないし、新たな発見や驚きもあるかもしれない。

あいさつの言葉は、自分は「したつもり」でも、相手に伝わっていなければ意味がなくなってしまふ。慣れないうちは仕方がないことだが、あいさつをする時に少しでも気持ち

の余裕があれば、小声でボソボソと言うのではなく、はっきりと大きな声で伝えるのがよい。また、相手に親しみを込めるという意味で、明るい表情を心がけられればよいと思う。せっかくははっきりと大きな声であいさつしても、表情が暗ければ台無しである。さらに、「今日はいい天気ですね」「お花がきれいに咲いていますね」「最近、寒くなってきましたね」など、あいさつに一言添えたり、「楽しかったです」「お疲れさまです」「気をつけて」「さようなら」「また明日」など、別れのあいさつを交わしたりすることで、関係を気持ちよく終わらせるとともに、次に出会ったときの良好な関係につなげていく。そして、それらのあいさつを嫌々言うのではなく、そこに“心”を添えることが大切である。

大人と子どもだけではなく、大人と大人が積極的にコミュニケーションをとることも、情報収集のネットワーク作りには欠かせない。例えば、子育てをしている母親である。地域社会と接点が薄い「核家族の子育て」には限界がある。母親が一人で子育てを背負ってしまっており、先の見えない不安と闘っていることが多い。あいさつを通して、知り合いを広げることによって、家庭を地域社会のなかに開き、親自身が仲間を作ることによって、子どもを育てる上で必要な知恵や知識を共有することができる。まずは、大人自身があいさつプロジェクトを実践し、その姿を子どもたちに示していくことが大切である。その姿を見た子どもたちが、「僕たちも、あいさつしてみよう！」と自発的にあいさつをしていくことが理想的である。あいさつを通して子どもと出会った人びとは、子どもだけではなく、その親にとっても大きな存在である。地域の高齢者は、若い世代とはまた違った目線で子どもたちを見ている。子育ての経験が豊富な高齢者は、「しつけ」や「教育」に対して、大きな役割を担うことができる存在である。昔の生活や遊びを、子どもたちに伝えることもできる。近所に住むおじさんやおばさんも、我が子を見るときと違って、冷静な目で子どもたちを見ることができ、親に対してアドバイスや助言ができる可能性もある。地域の子どもたちに温かいまなざしを向けてくれる人、そうした人たちが子どもの周りにはいることはとても心強いし、子どもを地域のなかで育てていくという一体感は、子どもにとって安心感につながる。そのような関係を構築するためにも、まずは家庭の中から、温かい言葉や肌のふれあい、「ぬくもり」のある関係作りを目指していくことが大切である。

引用文献 / 「かならず実る子育てのひみつ」増山均著、かもがわ出版、2004